

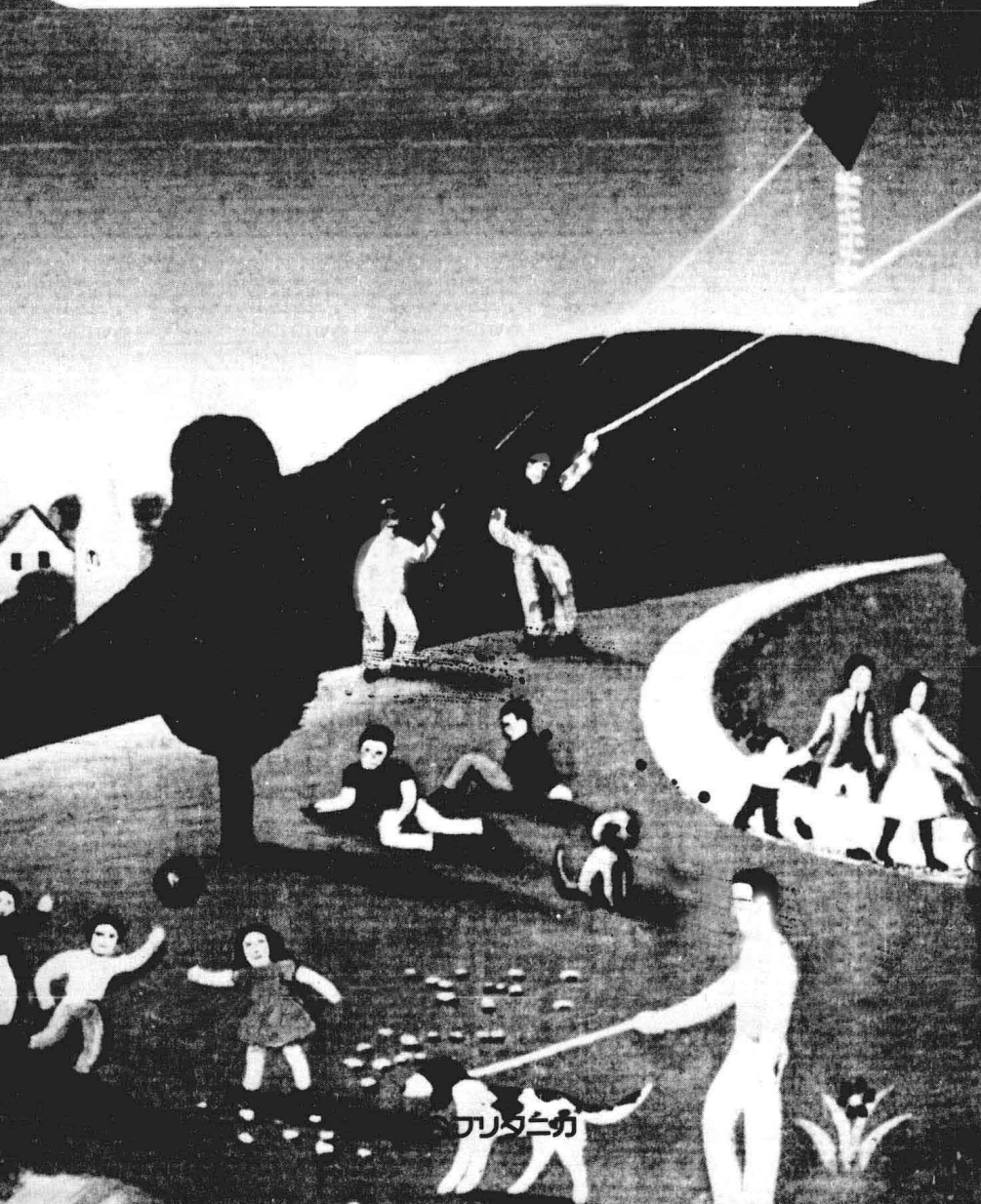
テレビエッセイ

すばらしき仲間 I



テレビエッセイ

9はらしき仲間 I



スリタニカ

すばらしき仲間Ⅰ

1977年2月20日 初版

1977年3月25日 再版

77

編者———C B C・イースト

発行者———吉田 稔

発行所———株式会社ティビーエス・ブリタニカ

東京都千代田区三番町28番地1 秀和三番町ビル

郵便番号102 電話(03)230-0311

振替東京1-131334

印刷・製本——共同印刷株式会社

©C B C・イースト, 1977

0012-105001-4968

落丁・乱丁本はお取替えいたします

すばらしき仲間
I

CBC・イースト企画・制作
「すばらしき仲間」より

目次

当世戯作者かたぎ——7

井上ひさし／井上好子／藤本義一／藤本統紀子



体験的教育論——53

岩城宏之／黛敏郎／山本直純



激論・三奇人——79

遠藤周作／北杜夫／佐藤愛子



能力開発法——125

糸川英夫／貝谷八百子／松平康隆



王者の道・守りの哲学——165

大山康晴／川上哲治／岡田 実



わが娘はアメリカ人——207

江崎玲於奈／江崎真佐子／広中平祐／広中和歌子



あとがき——233

当世戯作者かたぎ

井上ひさし・好子
藤本義一・統紀子

井上ひさし

いのうえ・ひさし 小説家・劇作家 一九三四年山形生まれ 浅草フランス座文芸部員を経て、文筆生活に入る 七二年『手鎖心中』で直木賞受賞 著書に、『表裏源内蛙合戦』『道元の冒険』『青葉繁れる』など

井上好子

いのうえ・よしこ 東京生まれ 一九六一年結婚 以来主婦兼ひさし氏のマネージャー、芝居公演のプロデューサーなどをつとめる

藤本義一

ふじもと・ぎいち 小説家 一九三三年大阪生まれ 映画・ラジオ・テレビの脚本家を経て、作家生活に入る 七四年『鬼の詩』で直木賞受賞 テレビ番組「11PM」の司会者 著書に、『ちりめんじやこ』『生きいきそぎの記』『人肉サラダ』など

藤本統紀子

ふじもと・ときこ 神戸生まれ 六二年スポーツニッポン大阪本社文化部に入社 六三年結婚、以来主婦兼義一氏のマネージャー 七四年よりテレビの司会をつとめる

戯作者とは、辞書によれば、江戸時代の俗文学、特に読本・黄表紙・洒落本・滑稽本・人情本などの作者の謂であるという。しかし、必要条件として、さらに次の二項を加えてみたい。(1)最上級のエンターテイナーであること。(2)時の権威および体制に対して、したたかな反逆の精神を有していること。

必要にして十分なる条件を満たしうる戯作者、たとえば山東京伝、十返舎一九、そして平賀源内、これらの江戸の戯作者の衣鉢を継ぐ作家を、昭和の五十年代に求めるとすれば、東の井上ひさし、西の藤本義一の両氏にとどめをさすであろう。

ところで、両氏の戯作者精神を醸成した土壌が、軽演劇、テレビ、映画といった大衆に密着した芸能・芸術であったことは興味深い。たとえば、井上氏の場合、浅草のストリップ小屋から、つまり、文字どおりの裸の庶民と触れ合うところから、その作家としてのキャリアを踏み出していることは、現在の井上氏にとっても重要な意味をもっているに違いない。

今日は、東の戯作者を育んだ土地浅草に、東西の戯作者が出会うことになった。

俚諺に曰く、〈名作家の陰に「名妻」あり〉。脂の乗りきった二人の作家と、円熟しつつある二組のご夫妻に、男と女、夫と妻、父と母、作家とその女房、様々の立場から縦横に語っていただいた。

友を得ることは尊い。友は、ただ、がむしゃらに求めて得られるものではない。ここが金や財産と違うところである。井上ひさし氏とは、大学時代からの懸賞の好ライバルであった。抜きつ抜かれつのレースをやった間柄である。それだけに、最近になって会うと、おれは、ほっとする。第一の戦いは済んだのだ。だから、第二の戦いに向かっていこうじゃないかという気になる。友は、この世で、憎しみをこえた敵なのだと思う。——藤本義一

藤本 いやー、どうもどうも。

井上 どうも。久しぶりで。

藤本 オーストラリアに行くっていうんで、歓送会やろうと思って。

井上 あ、そうですか。どうもありがとうございます。

藤本 今、懸賞のころを思い出してただけで、懸賞つてのは、何年くらいやったかなあ。あなたが一万円とるとぼくが五千元、ぼくが五万円とるとあなたは三万円という、抜きつ抜かれつということをやっていたわけが……。

井上 藤本さんとぼくが競り合ったのは半年くらいです。藤本さんのほうが先で……。

藤本 半年かなあ。二年くらいあったんと違うかなあ。

井上 いやいや、ぼくが藤本さんの跡を継いだわけですから、重なりは半年か、八か月くらいですよ。

藤本 どのくらいかせぎました？

井上 えーと、最盛期は四十万円くらいですかね。

藤本 じゃ、わりと……。

井上 いやいや、一年で。

藤本 そしたら、ぼくのほうがちょっと上かわからんなあ。

井上ひさし
井上 好子
藤本 義一
藤本統紀子

井上 藤本さんはたしか七十万くらい……。

藤本 ところで、懸賞金で結婚したってのはほんと？

井上 まあね。藤本さんが芸術祭の賞をとったでしょ？

藤本 ああ、二十万。

井上 ぼくは次の年とったわけですが、値段が下がって十万でした。

藤本 そのかわり短かったんじゃないの？

井上 そう、一幕物でした。藤本さんがとって、もう藤本さんがそれに投稿しないんで、ぼくが次に出して、トコロテンみたいに押し出したわけね。それで、その金で結婚した……そういう感じですね。

藤本 文部省はいいなあ。(笑い)

井上 ほんと、感謝しなくちゃ。

藤本 結婚に寄与してるわけだ。

井上 そうなんです。

藤本 その文部省に感謝しながら一緒にあった奥さんと子供さんを連れてオーストラリアに行くそうだけど、だれのどういう発案によってそうなったわけですか。

井上 全面的にぼくの発案ですね。

藤本 ぼくだったらね、一人で行きやいいのと思うよ。なにも弁当とおかずを……。井上 いえ、おやつです。

藤本 その弁当とおやつを持って行かなくなっているんじゃないですか。

井上 いや、でもね……ぼく孤児院で育ったでしよ。それに娘三人でしよ。だからいづれ娘はみんな出ていきますよね。せめて一緒にいられる間は、できるだけ一緒にいようと。どうせ、いずれは別れなきやいけないから。そうした実にセンチメンタルな動機です。

藤本 と、いうと、奥さんが子供を連れて行こうという意志じゃないわけ？

井上 女房は子供連れて行くのはいやだって言ったんです。

藤本 女房子供を置いて行くのは忍びない……？

井上 いや、女房を置いて行くのは、こっちの発想にないわけですよ。どうせついて来るだろうっていうのがあるから。

藤本 ああ、そう。

井上 たとえ地の果てへ逃げようが、月へ飛んで行こうがね(笑い)。……必ずついて来るって、もう分かっているわけですよ。

藤本 おさえることはできない？

井上 いや、おさえることはできませんけど。

藤本 女房を置いてさ、子供だけ連れてったほうが……こう外国映画によくあるじゃない。

井上 『子連れ狼』みたいでいいですけどね。

井上ひさし

井上 好子

藤本 義一

藤本統紀子

藤本 格好いいよ。女房置いていきやいのに。

井上 女房を置いて行くのにかかる手間と、向こうへ行つて女房がいることによって生ずる手間とどつちが大きいかって考えると、女房置いていくために、いろいろ言わなきゃいけないでしょ。そつちのほうが大変なんです。

藤本 なるほどね。それに、またこつちのほうで文筆なんかいろいろやられたら困るしねえ。

井上 そうそう。

女房族の生きがいは……

藤本 ところで、女房族っていうのはどうして自分が亭主をつくっているような気持ちでいるのかね。

井上 ま、それが生きがいなんじゃないでしょうか。

藤本 生きがいかねえ。

井上 生きがいでしょう。

藤本 本当に自分が培養してるように思ってるわけでしょ？

井上 思っているでしょうね。

藤本 もしもわたしがいなかったら、あの人はだめだと……そういうふうな意識をもってるんじゃないかな。

井上 それは、はっきり言いますね。

藤本 言うでしょ。何一つできない人だとか。

井上 確かに、時々ものを忘れて、「メガネどこへいった」とか「財布どこへいった」というときに、不思議に捜し出す才能があるわけです、女房つてのは……。

藤本 そう、小さいことをね。

井上 それで、「わたしがいないと……」ってなるわけです。

藤本 それは生きがいなのかね。それとも……。

井上 生きがいっていうよりも、それで仕事をつくり出してるんですね、おそらく。

藤本 洗濯とか炊事とか育児とかというものが看板になってるんだね。

井上 そうです、そうです。

藤本 うーん。で、たとえば、あなたの芝居のプロデュースを奥さんがやるじゃない。生き生きしてますか。

井上 そらもう、生き生きしてますね。

藤本 と、いうことは、プロデューサーだから当然入場料なんかがガッポリ入ってくる……それで生き生きなんだろうか。

井上 そうじゃないです。やっぱり亭主のなかにもうひとつ食い込んだと。それから、こっちは全然その気はないんだけど、女優と作者っていうのは、時々できるわけですよ。それを……。